古今

立花全集

全

立花全集
全部壱冊
紙数百十四葉

ヲ多 9
1517

ヲ 1517 門 號 巻

偏照金剛 秘密國字卦 占盤添 小本 全一冊

皇京 菊丘臥仙江文坡撰

此書ハいろはうらなひの書也一名弘法大師いろは占ともいふ即いろはに従ふてちの八字を以て八卦とし八卦を八ツ重ねて六十四卦とし天文地理人事の吉凶を産に至る迄風雨快晴家宅人物人事身体時節静物動物婚礼養子穣望商売の吉凶待人旅行走人諸病の吉凶失物走り人の方角人の方角を知る事上毎年毎月毎日毎時の吉凶禍福ほどふに婦人小児もうらなふとも見安し其外くうらなひあたる事神変自在なり此書を宝とし是をもてうらなひ給ふべし人々の読安からしめんが為に板に彫て弘め侍る也天明元年丑年秋

京都書林
寺町五條上ル町
ひしや治兵衛板

但州 湯嶋

豆花全集序

夫世上の色様をみるによりくわそひ業それぞれに御ぐりは志きぬむかしは悟てをまくりあれ志とわら或ハ詩哥に心をよせてあらのやまとのさうひ御ぐことの業学者霧の玉んどうさく人とりち或ハ囲碁双六よ月日をおくりて絶れるしむともあそびおのが人々かくれ事をたのしむ色或ハ愚者に惑ふまたかう御ぬこぶけて底学多すをぬこ又此の

虎をもりんと称ぶふあり或ハ恋慕愛執に浮
身を沈流して親のいさめ世乃そしりをも
憚らずあふさきるさにおひみだれて多れた
うるしかふかる或ハ佛なん虎うとうらまで
山野に庵を結びの吉松の月にかゝるをも無志く
浮世の塵に染しつらげにもこゝ又世にをとすがら
口は浄刹にかなく念仏誦経香花燈明をた
こゝろげにかりそめくれとく世乃中のたれしを
は虎はけにほんとさはしたうし扱をご捕中るぐ

おもいく小さく筆にも尽しがたしさまざま
ろ是なるんいはまろ非なるんや実に争ふ蔵まら
立花を好こ然代なら須藪にをきつゝ古きほさ
無き其のかや俗然窮ひやのくつく是を案じ
速ば花は鳴うらひよみよ思むふつ尽いづ連
うあをよ由げるや実の草木れをそしるさ
みどりかん立然其のまくに亀てく久しきこれ虎
れ無て世ね色げよとりうか称立花ハ釋尊
れ拈花微笑ふる事にあらく眼なれ前によ森

夫れ清浄をうつして瓶花落葉をわかり
悲常乃理をさとらしめ或ハ四時をこなる道百
花其ありさまをあらハし道ハ仁儀の理を志らしむるを
しるべからざることを志る或ハ又是を得しいま
活けまされバ妙の法をひろめ頂是を活けバ一瓶
花内を出せばあまがした或ハ千草万木のよのう
多く生まて人の心をなぐさむる事を志
め或ハ花によそへて君の恵を思ひ居りあと
無く捨てかうけれいさぎよきことを志る出来て

皆一瓶のおもむき多く佛前に一花を備へあらハ又
根又力七等覚八正道の開發を示し志くはよく
佛境界の無くそのとく諸やむ事道にかって是を
見バ人の心へはいさしのど手がたかしこはこのあるりはあり
これバ妙の法の楽は一室の床乃内外稜志ぐ是を花
所ていへばこれを捉ハあら活じと思へどいづ道にかなえ
色时と所と詩歌かけてハ一川を立べきと立花
も又前くれどもし此ある世に是をいかしへん插ど
これ俗にいふとみるに大の七川の捉ハたがつねと見

ゆゑに花のまことかくさかにさくくちの作しわいい
もつれくらずひ下草の大つまかく上下れ名なく
於しのゆめゆめ口伝なれバ情に沢らせて花を立
縁を来またし道和といふぐら天地生成出育
乃理にかなはらんや尤も立花の道と号して其
風わりといへともふかく秘してあらはさゞれど
嗚呼この風れまされなんきもす事に紙道とる
ゑらずゆへに伝受師授しと紙わため并絵図
五十瓶と同らり善悪しと志て名に立花全集
といふ此書をとなん人の道によらばたそらく八先
生のめく紙つぎ後に世に名を残さんか

立花全集目録

一 三具足花立様之事

二 對之花立様之事

三 五節花之事

四 祈祷并神前花之事

五 聟嫁取并祝儀花之事

六 絵を掛て立花之事

七 連歌座敷花之事

八 四季立花口傳之事

九 十二月用べき草木之事

十 城中之立花口傳之事

十一 底口中口細口花瓶ニ立る口傳之事

十二 違棚花立様之事

十三 立花十三ヶ条法度之事

十四 花瓶の変四季ニ替事

十五 入院花口傳之事

十六 惣じて立花口伝の事
十七 高立ぐろ草木ゐくす
十八 一色花立様の事
十九 手際の事
二十 立花の草木物様くさ
廿一 花の道の事

立花全集之上

一 三具足花立様之事

三具足の花ハ真れ高さ花瓶一ツ半なりさ
迚ども目指く見えてなを真成ハ花瓶のおそく
高き脇ハ枝とくひくき花瓶ハそのさゞめ小なら
ども見合て指すら又枝葉れ次第ハ前ハ短く
後ハ長くたハ短と見べし 賞翫の花とく当
季乃花ハ座上主君と請く立べし 長さ短さ
葉ゆく又方紙請よ前花の見んにそこらく真よ

下草を添てあしく如くにそろぐべし前際までも
高きに手紙あしく立べし方角もなく下手紙
花立所に立べからず

二 對乃花立様之事

一 對の花れ真ハ或ハ松と竹と或は松と梅と或ハ
松と松とすぐるべし但松の真對にする時は
真木ハ赤く真ハ白松れ青きをもちふべし
或ハ草と草と或ハ草と木とすぐるも花合かんは
くろい真にもちべし又對の花ハ緑乃色かとも對

にさしされども同じ色ゆうに猿猴がうすぐ紙つかふ
悪しくとるに前垂すぐハ心あるべし多くへバ一
瓶にあのまへと見あらバ今一瓶にハのがり流
すぐに継ふく其枝下に何りとも有しらふやう
にするなりともかも太くとがめうの心持なり

三 五節花之事

一 元三ハ真に　梅　當季　水仙　金銀花すぐ之
一 三月三日ハ真に　桃　柳　當季　款冬すぐ之
一 端午ハ真に　竹　當季　菖蒲　石竹すぐ之

一 七夕ハ専ニ 梶木 長春 仙翁花 桔梗などく

一 重陽ハ専ニ 鶏頭花 菊 長春 萩などく

一 仙翁花と鶏頭花とハ中段より下に生つね也

一 水仙ハ花一りんに葉を数づゝ生ふなり何の立花にも水仙ハ左の後角にそへぬなり

四 祈祷 并 神前花之事

一 神前又ハ祈祷の花ハ勿論真に立なり枝葉これさくハる専に生べし真に付添くさを影向の枝と云べし

五 婚礼 并 新屋花之事

一 婚礼の花ハ勿論真なりとも何れの花も同前なりちうさ入の花ハ式本なり男花にさうそならハ又祝儀より天河二川にわりて色たたるの口傳有又新屋の花ハあたひ火の枝陰陽に立べし 右の花にいるべき草木ハ

松 竹 梅 椿 柳 海棠 石竹 鶏頭花

石躑躅 桔梗 菊 桃 石榴 仙翁花

岩檜 牡丹 金銭花 橘 節黒 白椿

芙蓉　停春　水仙　百合　菓　茶萩
杜若　常盤木　合る花　まう葉　まう枝
陰陽和合の枝ちまたを立べし表ハ合表よ
し又男女ハ赤白とて男ハ赤く女ハ白しこ
れらを心得て立べし
祝言よ嫌ふ草木
一　雑木　雑草　野草　隠草　隠草　根木
六花　六葉　残花　河骨　藤葉　紫竹
紫苑　米柳　木瓜　茶木　竜胆　木槿

白蓮　芭蕉　蘇　薇　罌子花　山梔花
山卯木　沈丁花　曼珠沙花　鳶尾草
除去　枯たる枝葉　破葉　腐葉　けふの類之

六　絵を掛て立る花之事

一　掛物の絵よよく心得て立べしたとへバ人形絵又は
何よくも生物絵ならバ面を立ぬさぐるなう
連よくかやうよ枝をあひしらふなり向緒
だめくされぬやうよ立るなり
一　墨絵よくも彩色絵もし花或ハ草木すぐるゝ

絵の銘筆或ハ亭主の秘蔵の掛物ならバ其絵の
花草木を立花の方へ借り用ゆることもあれ
時ハ見わけ行事なれバ上手の人用ゆるハよく
うつりのため

一 名画の名所山名跡ハ海山のかぎりのすがたの絵ニ
ならバ其風景をよく／＼思ひ遣りて其景山乃草木をよく用
いたしく行要なり

一 四季の花ハ上座の本紙常のやうに景ふなり

一 書院乃床なるにハ三幅対或ハ二幅対あるとも

三幅の時ハ中央を本とし二幅の時ハ上座乃
かたを本とすべし

一 墨跡なるものハ其時ハ文字を花のくそを嫌
ざるものなるべしされども其掛物なども
時ハ花をもてなすべきなれど一ツの品よろしきなるべし

七 宴賀座敷花之事

一 宴賀のあるぐれ花ハ名号神号なども掛ておく右
の本に花を立べし是ハ総じて座のかたなし

八 四季立花四方之事

一　春より夏秋の始までハ一種のうち草花ばかりに
立べし秋の末より春の始までハ木ばかりに立
べし春の枝にかへしさく黄山吹の咲比より折
から牡丹芍薬杜若桔梗紫菀仙翁花な
どの類のひらく時節ハまく立べし

一　秋の草に菊竜胆の河骨より冬枯の野山の
花に梅さびしろ深き時節などもいさゝかひさく
立べし

九　十二月用べき草木之事

正月　梅　　二月　柳　椿
三月　桃　杜若　　四月　卯花　芍薬
五月　竹　菖蒲　　六月　百合　蓮
七月　桔梗　仙翁花　　八月　桧　白槿
九月　菊　鶏頭花　　十月　唐水木　南天
霜月　水仙　寒菊　　極月　枇杷　早梅

十　城中之立花心得之事

一　城中の花にハ椿　葵　太山樒　枯枝などを
用べからず　捨木を用べし　数多く立花にハあん

ぎやうかうとかんようなり

十一 広口中口細口之花瓶心得之事

一 口のひろき花瓶ならバ上わく枝葉なが
く立べし又お垂れ高さよきほどく下草を
花をかるく立べし端緒れ枝ならふなり

一 中口ならバ中わくむらかせて立よ

一 細口ならハ水際よせて出すやうに立よ

一 三角なる花瓶ならバ口隅へ枝葉出ぬやうにさ
立べきなり

十二 違棚之花立様之事

一 ちがひ棚なれバ下の花ハ上に棚ありて縮きゆへに
花の高さひくく横へも出く立つたりされどもたな
の柱押板より前へ枝葉を出すべからず

十三 立花十三ヶ條法度之事

一 つんだきたる花されを縮く立る事

一 葉あの横花ぞり高き事

一 同じ横を二所に立る事 但し色紙の中の外は
おうじ横ゆくもひとつぶよりおそくろやうに立

なかしろハ二所へ用てもくるしからず
一 草と木なく包木ハ草なく活む事
一 古法の事 但一方ある指合せかくなるハくれ
しうべし
一 枝葉の分に活るやうなる事
一 切枝とて十文字に分木切事 但左を逆にとは
はべし又内枝のうらなく切るハよろしからず
一 指枝とて面へ長く出る枝葉の事
一 蜂指の枝とて後へ長くおれる枝葉の事

一 本切の事 一 裏より前へまはる事
一 花と其葉とをひらかずに余の枝立る事
一 花瓶の口よりさがる枝葉の事
十四 花瓶の色ハ季に替る事
一 貴人高位の賞翫の時花瓶の色替る事あり
金ハみどり銀ハ青磁秋ハ瑠璃色ハこもうの
色紙用べし
十五 入院の花の心えの事
一 入寺の花ハ堂壇のうら添梅にハ竹をもちふべし

一 わきゆしれ花ハ色赤き物を立べからず赤き
乃類ゟ見べし是火難をさく故縁起なり

[十六] 物数立花の事

一 真二副三請四正真五見越六流七前置
此七つ色々かく見べし

一 正真ハ花瓶面のちがひなきなり

一 除真ハ向ふのく対すべし

一 中央れ前ハ左右を合て上座を請べし勿論請
方面ゟするべし

一 客院の花ハ裏表を前と心得べし

一 二瓶の内ゆくど一方へ出くおろ枝葉あるハ一方ハ縦く
其外二瓶のくろ枝を見べし

一 花瓶一方ハ開ろ一方ハつぼみとろ一方ハなるく一方ハひ
ろく一方ハのきよ一方ハ一文字よ一方ハあがり枝一方ハ
さがろ枝を見べし

一 まくゆたろ物れそれ小ハ二海ゆうろ物ハもちのつよ
きりの小ハようそれ丸とりひて取合よべし

一 赤き色の物ハ立付べからず

一 常わり木ハ　いの木　いぶき　松　榧　檜　椴なら
躑躅　茱萸まで八枝苔を生ふなら

一 四季の花一枝に三川開たる花あらバ面に立べし

一 一輪ざしハわらひのさし輪の多く枝にある花をバかりむ

一 陰の方に添を用ひ陽の本に開花を用

一 風流めく真ある枝にハ下草ひろく立べし　並
なる枝ハ下草高く立べし

一 三瓶の河骨花瓶に一本の前にひろき実あらバ
今一本ハ当なる花を見べし立紙の如く添

一 小さき花の多さ輪ありてより前座まで立てたるがよし

一 陰陽の花ぶとも表をみる花にあらバ裏を見ても面とつ
ふべし

一 松竹梅とて三瓶の花に用ゆる草をならべ

一 又三瓶をバ松を生て其又二瓶を松にて一

一瓶ハ当季の花を生ふ幸竹梅しを生ける

一 一瓶の内わくと見え花の本を弁一と言べし脇ハ
ても出る其の前に当る本を分二とし今二本の脇添

第三と留べし
一 せんかうをバりんきにそへどいはゞかろげ
てゆかしくさするなり
一 世話に花形手といふを出生ハ左へおさるるを
いふなり
一 宗花を常に時ハ花と葉とを用葉ぞうり常に時
ハさびさのかわらなし
一 竹にみんてんを常にとさらに流れをまじへど立実代
流よく常にハくるしかる須

一 かきつ花一八総縁に用べし残花ハ用べからず
一 ある草に太山木を指まぜてひきはみるをかあまさ
と花の道とやむる遠ど道によつて木の数
立合をくべからず
一 対する花瓶の真ハ草花青白とも見べし
一 花にあちら葉かある時ハ仰向葉を用常れとよろ
一 草花つきに木の流ひとく見るやうとよらなら
きれくつハうし流くやうくさるハ無し
十七 立る流す草ま木の事

一 金銭花　巻柏　ぜんまい　つまかくしこ　土筆
木山樝　沢桔梗　鳳足　しのぶ　ひとつ葉
ふきのとう　とちなし　岩躑躅　香附子
ぎぼうし　まんじゆしやけ　河骨　こあざみ
つりがね　款冬　ぎく　沢ぎさ　白丁花
沈丁花　野菊　鬼あざみ　こんぶりけ

十八　一色花立様之事

一 色花ハ五行の色を用ひてまなこりにならぬやうに色を入ちがひ多く立べし　又一色花相違への色に

紅白の色わかちぬても苦しからず是一色乃内の一葉也
数多く立ゆへなりくりくハ下葉それ絵図に色

十九　水際之事

一 水際ハ一方ハかるく今一方ハひきく海づらならぬやうに此色いひなしかけ水草多くよせてよせ流やうにするときは草入色々やうにつまさきなどハおもく様てよつき所に下草を沢山立べし
一 水ぎはれいなるハ仁角丸飯継などにて時のお来次第に立べし　あまりつくしく立違ハ水際に

しく見ゆるなり水ぎはつよきといふハ草ハ草に一
所木ハ木一所によくしげき木と見ゆくるん世ぎの
しげき木それぞれに細き木をうつはつよきなり
ぎはといふハ花の水際の細きをよりつよくいふに
はあらず

一　太口の花ハ水際しげく細口にハ水際ほそく中口にハ
水際中位によるべし

［二十］立花之草に木指添る事

一　竹筒の花のあしらひを花生に根を焼て節の下より

あたまに元をわりの一枝水に入て通バ水をあぐる事といへ
ども是ハならず紙にて水をあぐ法ハ下のあし一河ハ
通てよりとぬき竹の中へ水をとふくと入て上の
口をよくふさげバ水をあぐるなり

一　竹筒ハ水際より五分ばかり上に節のあるやうに指べし
さりながら竹の中ほどより節のあるなくハ添竹に
かくとみゆるやうにすれバ景ありてよし

一　菱の花水あぐる法ハ根を焼て根のくと二河ばかり湯
に浸すく通バ花ならおじなからも達ぎ水に入通バ花

まさひらくよし

一 蓮の花ハ切ぬ前に錢ゆく溜り見え根切り檜木の釘を以てまた蓮の中へさし入れハ自然に直之

一 おりゝの茶ハ冲とあつき湯に入てこゝろみに入く串とさしさか又おりゝの実ある見時ハかゝりつきとふ南油

渡き○のとなら懇志く草花ハ根を焼きれハみとわけて

一 あらハ天滅活流まくて出しかく小柄に松も

さすて出しかく下葉ゆくさいなりとうべしとく

紅葉かりの滅光あり盛り写べし

一 牡丹ハ天滅活流まで色出き見越に白牡丹をなすよし

一 南天ハ天滅活流とも色出すなり

一 桧葉ハ天滅活流まで色出すなる 桧前垂に出す

時ハ苔に流て出すなり

一 枝ハ天ぢかくよハつきつぎりくに一枝そへ出す是習く

一 松の天に竹添あるとき よくまに節あらバ

竹の際にめしあらし上よし其にあらバ竹の際に節

なせるがよし

一 山はじハ天滅活に出すなるゆゑくあげ給ふのへ

一 躑躅ハ椿ニ接ニあるき抽なり唐らびの葉を借接ニ
え唐らむを接ニ時ハ葉つまりて花をく葉色くさき
え接ニ見ゆりよなりしろ時ハ実と色ぞよ接ニ
一 柳ハ枝ざらりよ接ニあるき抽なり本つきよろしく添ニ
色接ニなりし又柳ハ花鶏の口より生へ寺か出みより
一 梅ハ枝添請流をぐく山色接ニ真ろ門枝の伝ゆく花細さ
又合たる下ニ結ひ添請よ接ニ時ハ枝ニハ花の多く
付るに接ひ添よハ花おそも申とる勝くらし
一 桜ハ枝添請よ接ニと門枝よ接ニ時ハ高く結ひ下

出ひらく花ふなり
一 梅ハさいハ枝山色流山色接ニあり結ひ用ひて
なり枝ハあるく結ひふくめなる枝ハひくきに結ふべし
一 柚ハ大柚の枝ニ接ニ時ハ苔を用ゆる結ひ接ニ
時ハ苔を用ひてよふれ
一 その実ハ一枝をまみ人山角ふあくゆく
よし実れ生を同前なり枝ひくくみなりなりハよ
あぬなり絶く見ゆべし
右六品をあつめ時よりおく本つきねなり

見合て作る事肝要なり

廿一 真菰之事

一 真菰ハ真と添との間に用ゆる又真の高さ程に
積の丈をおさず長さに作るなり

一 真菰の花所ハ壁を横になしたるものなりけり
めりよく又ひらりにみゆるやうに見ゆべしとうく

一 真菰ハ豆花を二河ほどによろ挿と用ゆべし

一 前垂ハ一方草ならバ今一方ハ木を遣ふなり

一 かぶの枝を前垂か前へ出しなおしの枝へ末とる

まがりし又男かぶと女かぶとのあいしらいハ苔下
草何にても色ちがひなるものをあいしらふべし

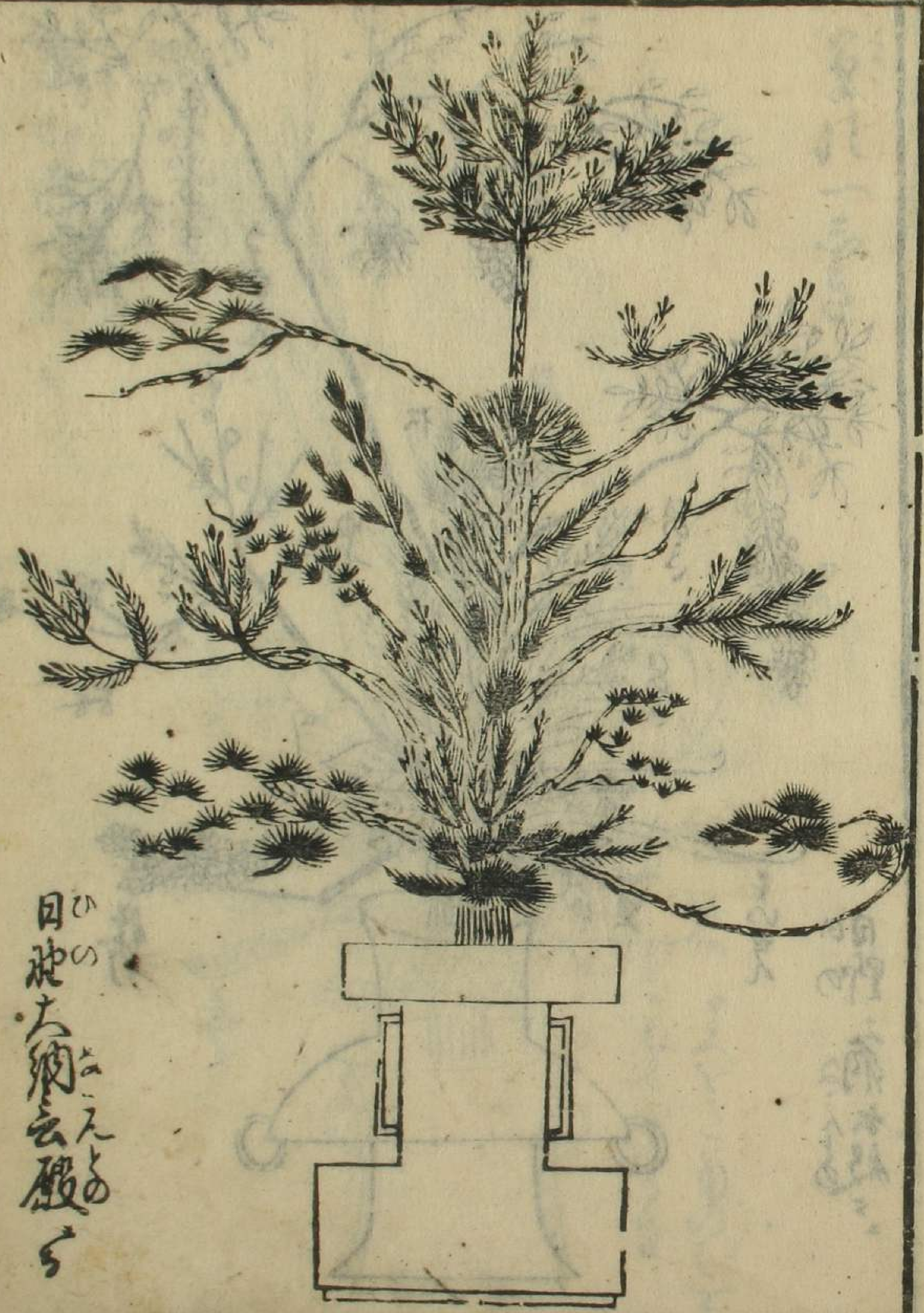
一 蓮花の真菰に浮草と云ものを草一枝とあしらい
れよりひらく性をもいふなりて杜若の花れあり
所さだめなし 総て人合て垂也 秘伝なり

あひおひの花

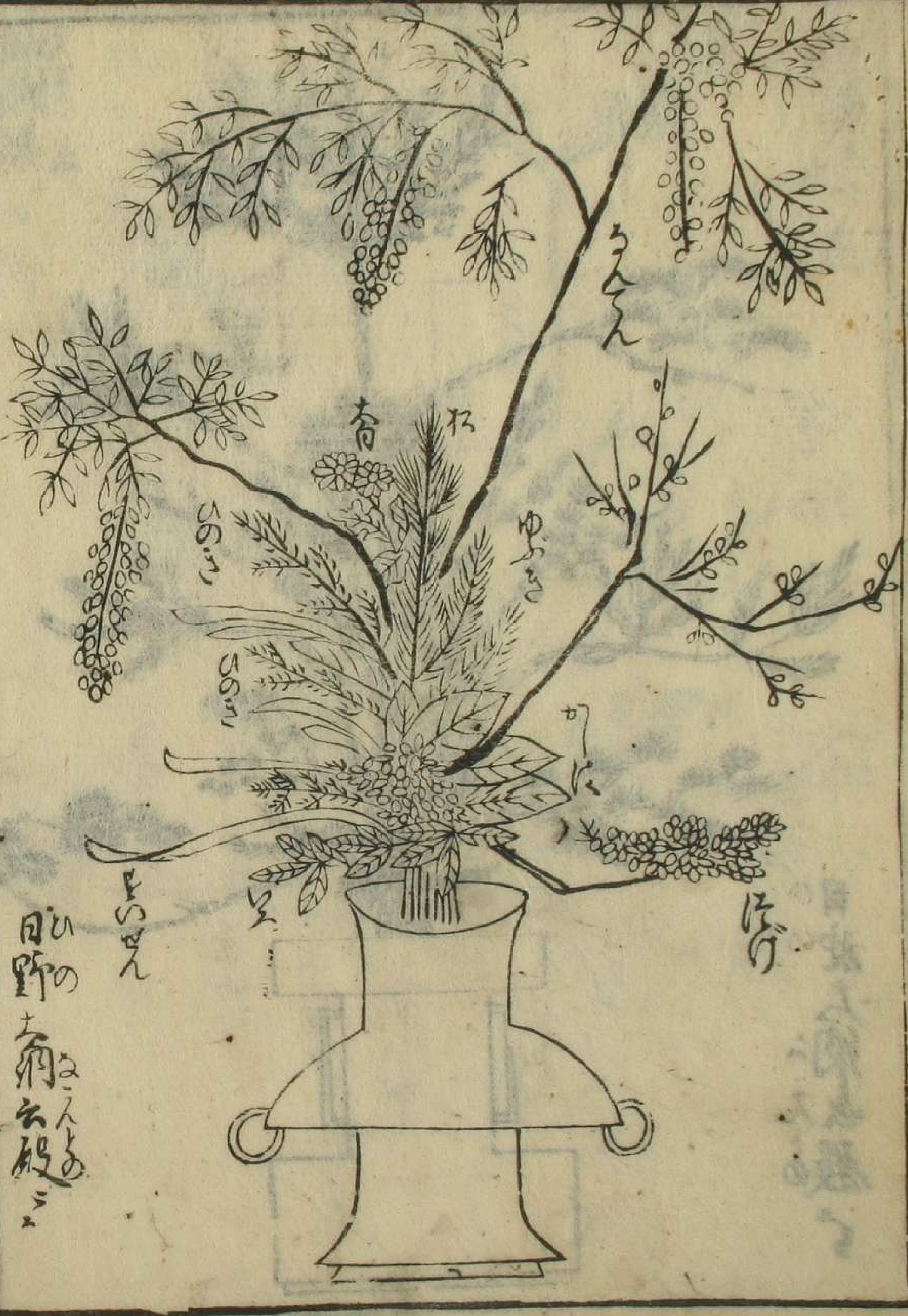
枝のまゝにてさすか
三寸ばかりわきより
絵みぎひだりに立つき
なり前八寸へ座あたり
かくのごとくに切り
入るべし

仙洞様にて

仙洞様二ゟ
大白
大白
ひのき

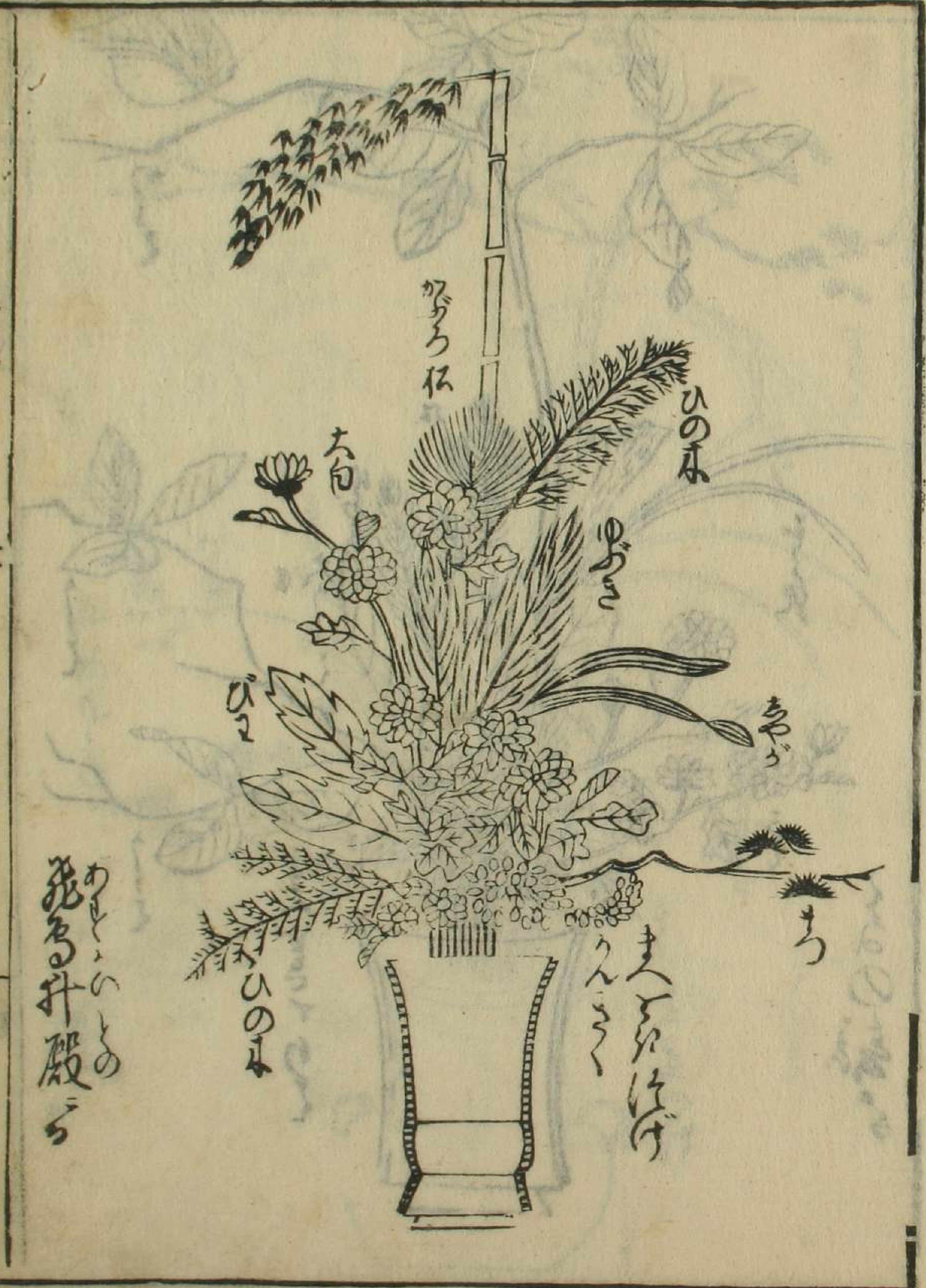

日野大納言殿ゟ

日野大納言殿ニ

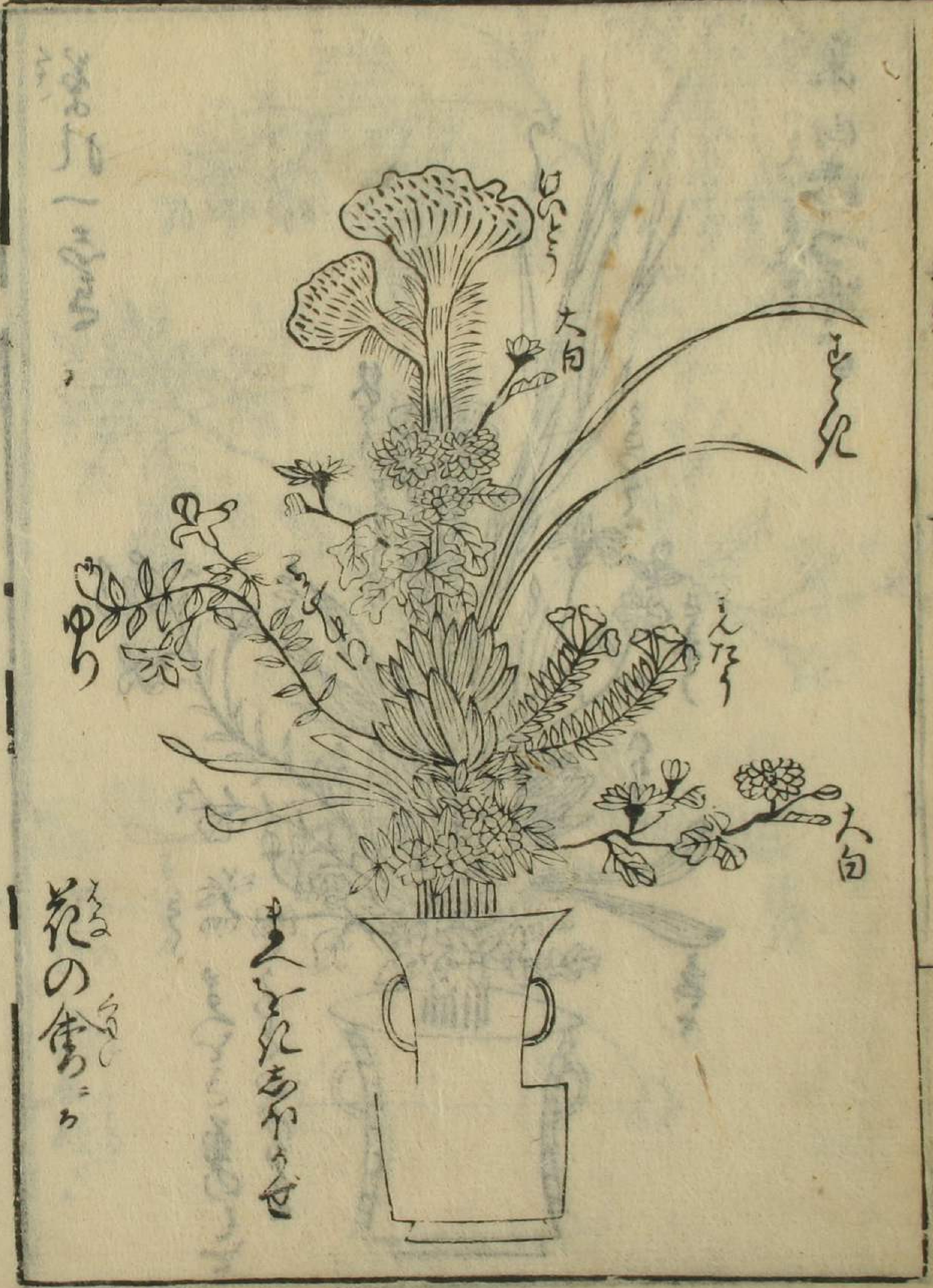


草花一色

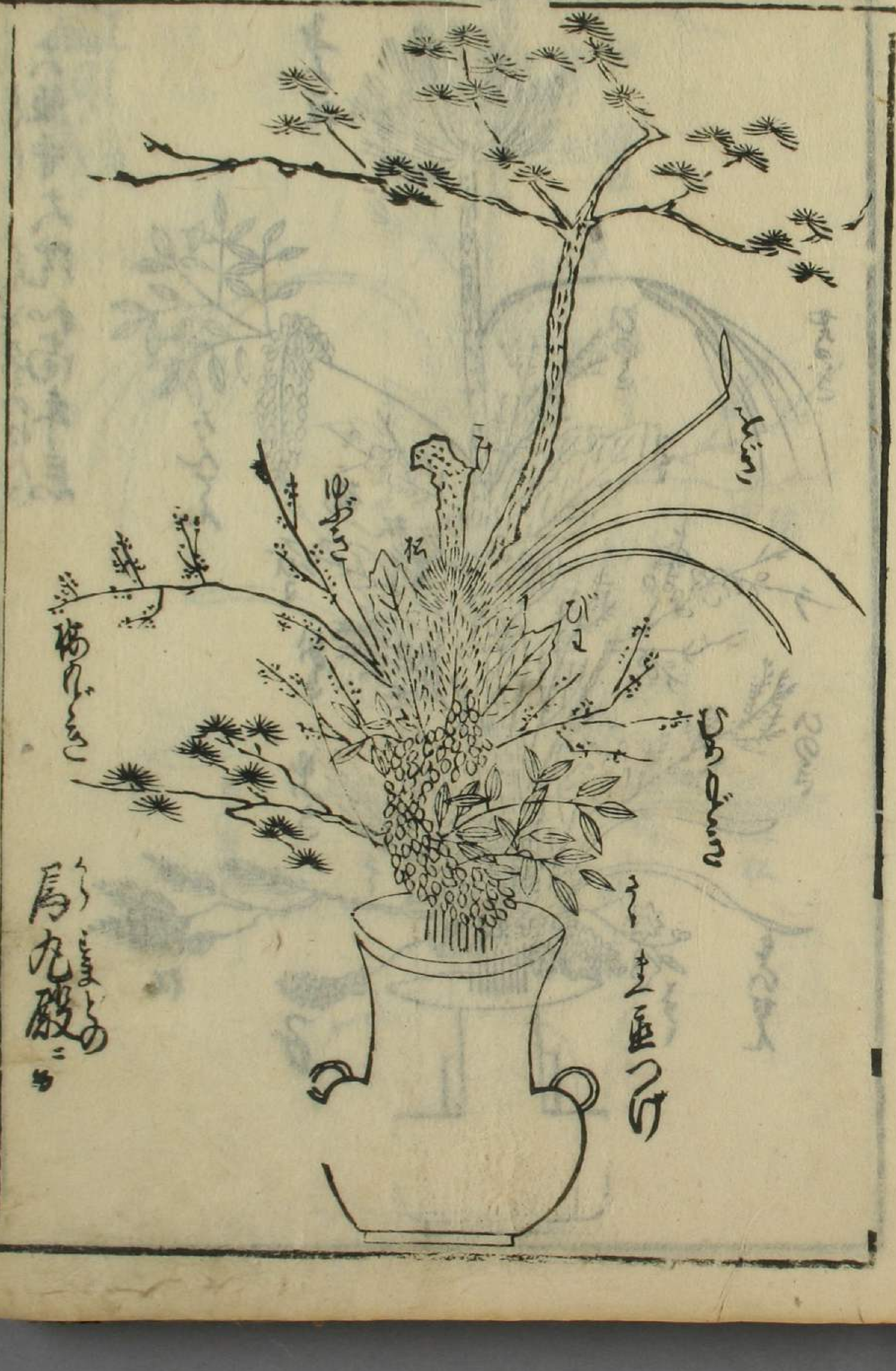
東山御門跡ニ

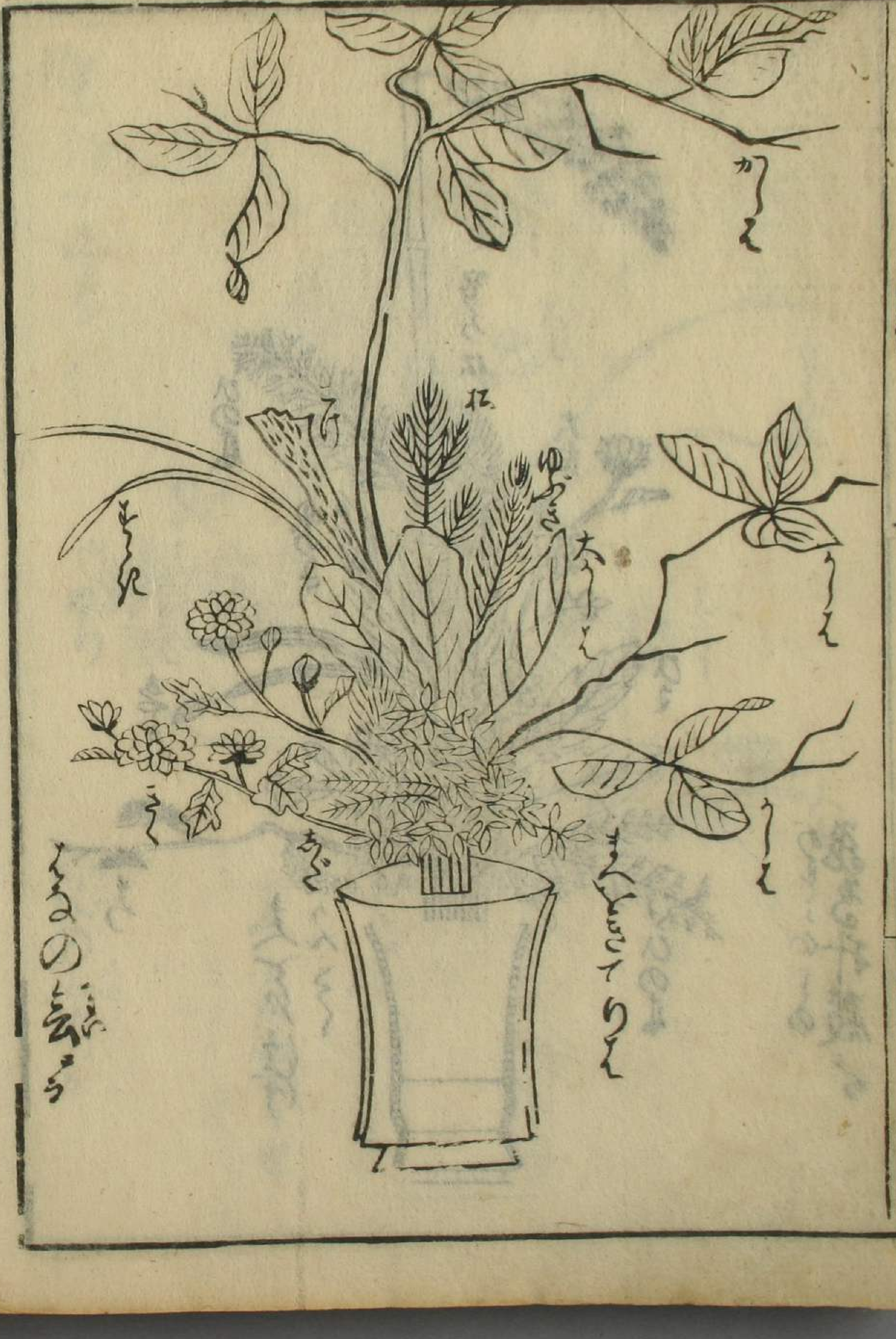


大白
ひの木
ひの木
飛鳥井殿より

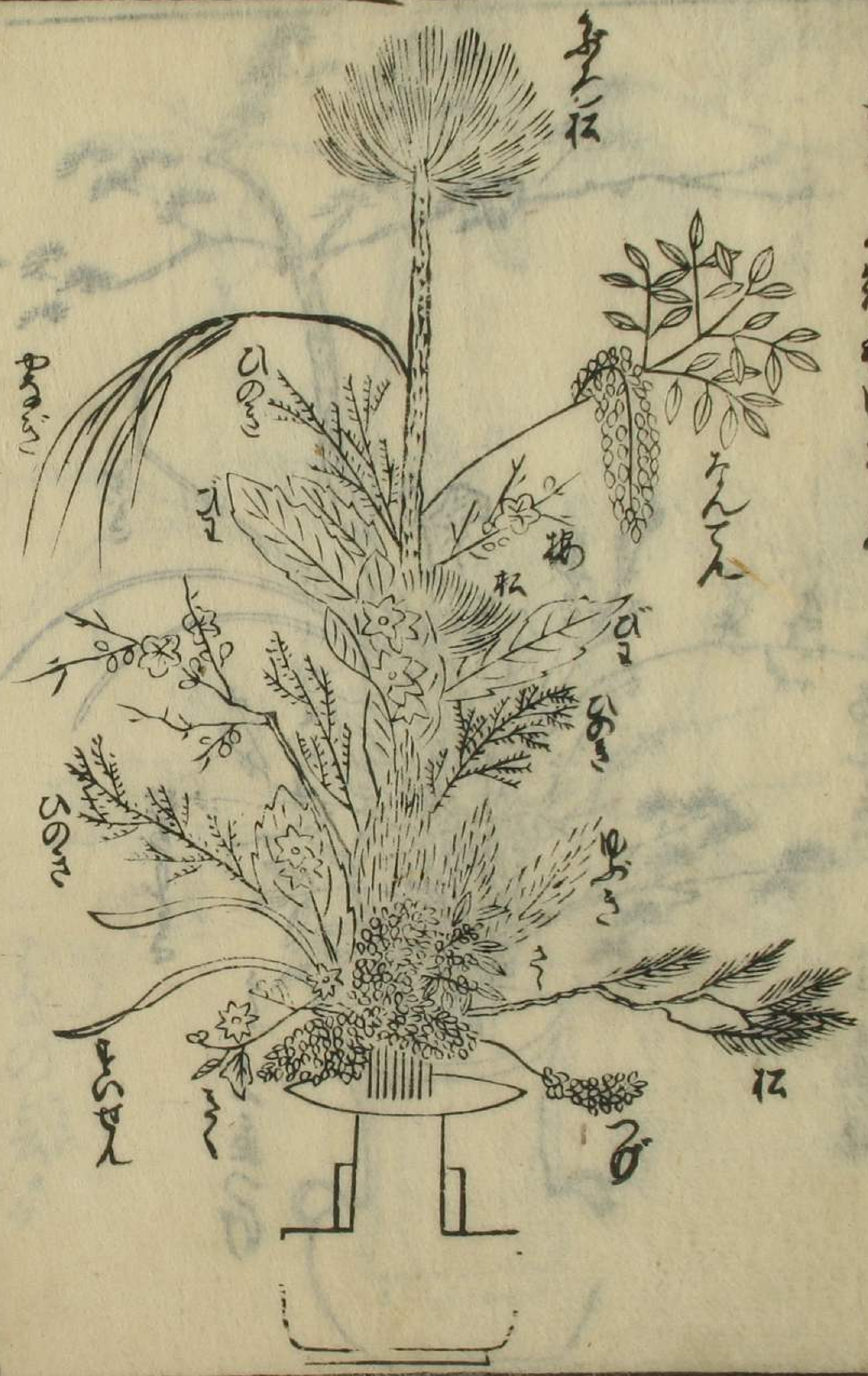


大白
ゆり
大白

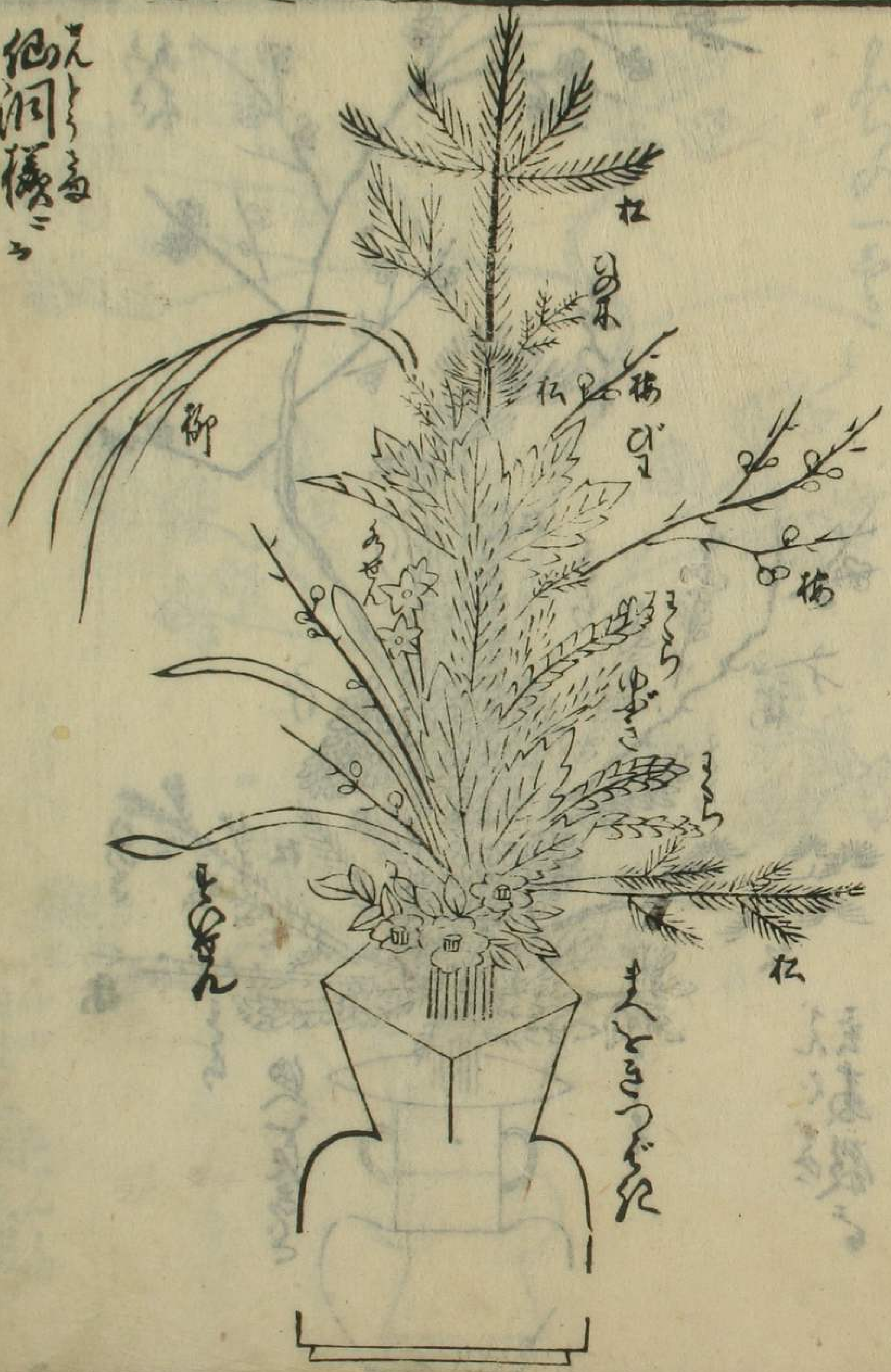

松
烏丸殿ニ


松

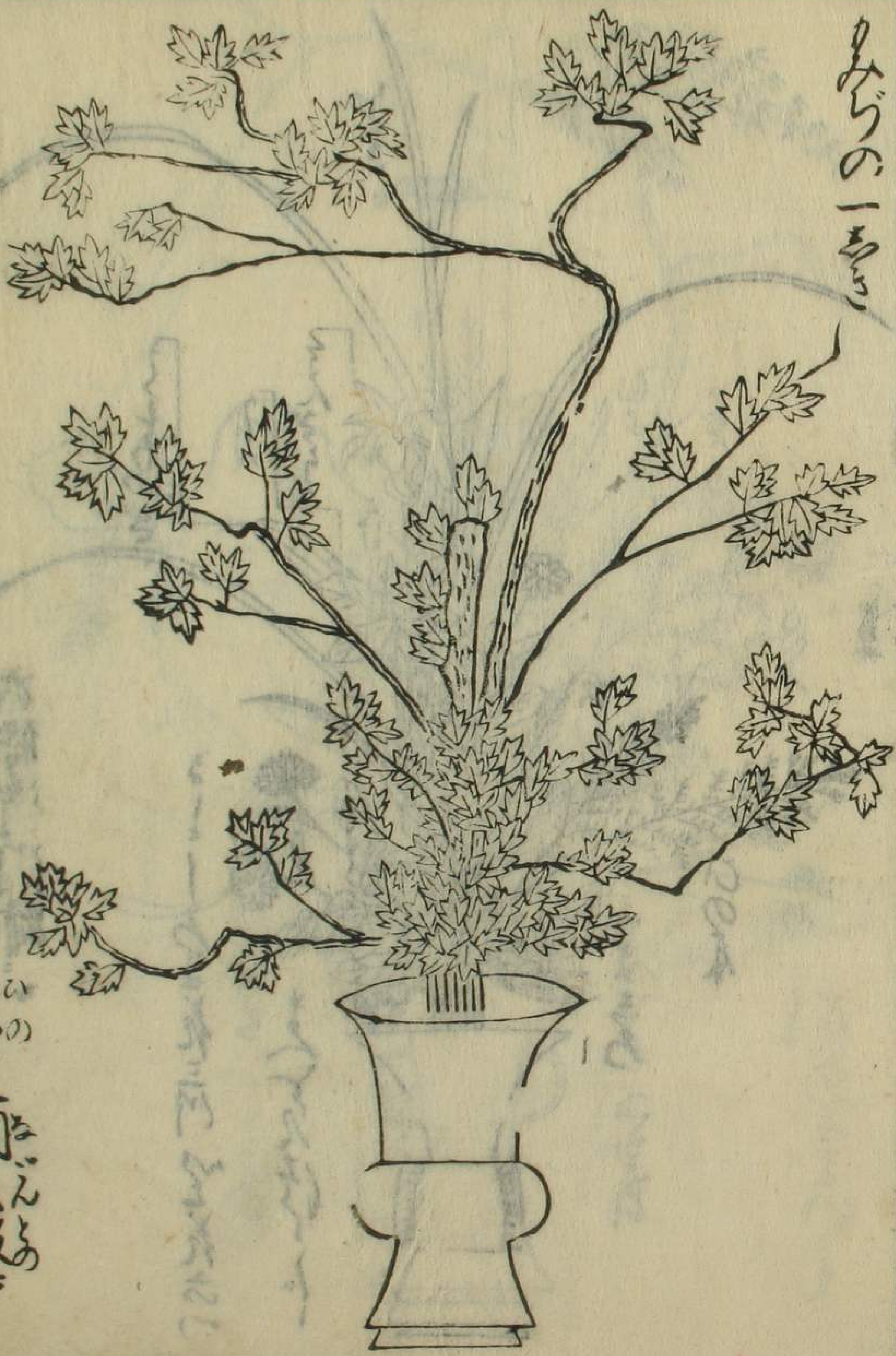
大徳寺大梵和尚年忘



絶洞儀之



松
松
桜
ひのき
松
松
桜



六條御門跡ニて

九條御所ニて

八

六條東御門跡より

日野大納言殿より

尾張ニ

仙洞様ニ

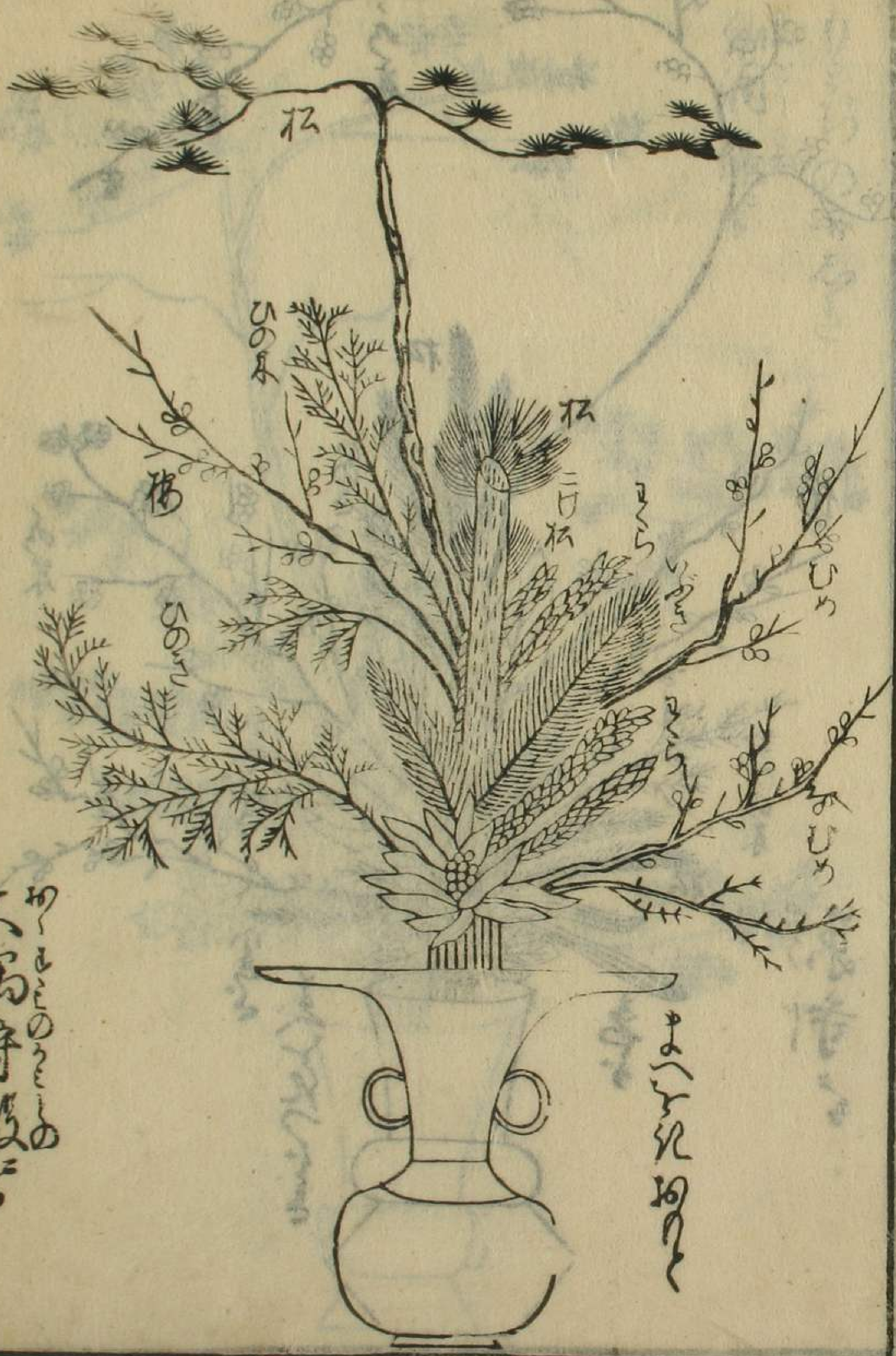
水仙の一色

御たて花きんせん花

泉涌寺にて

六條御門跡にて

日野大納言殿より



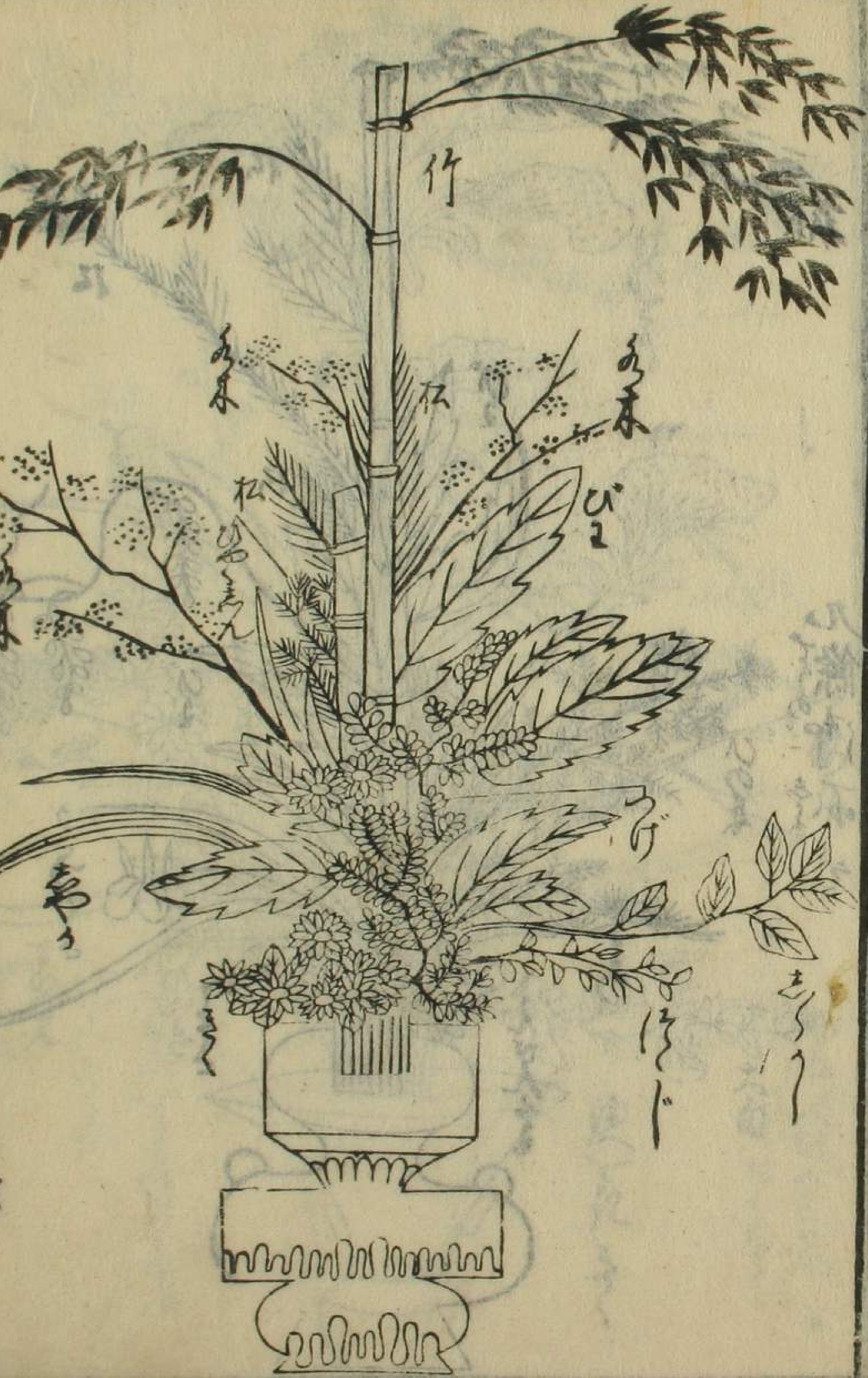
まへにたれ物なし

大隅守殿より

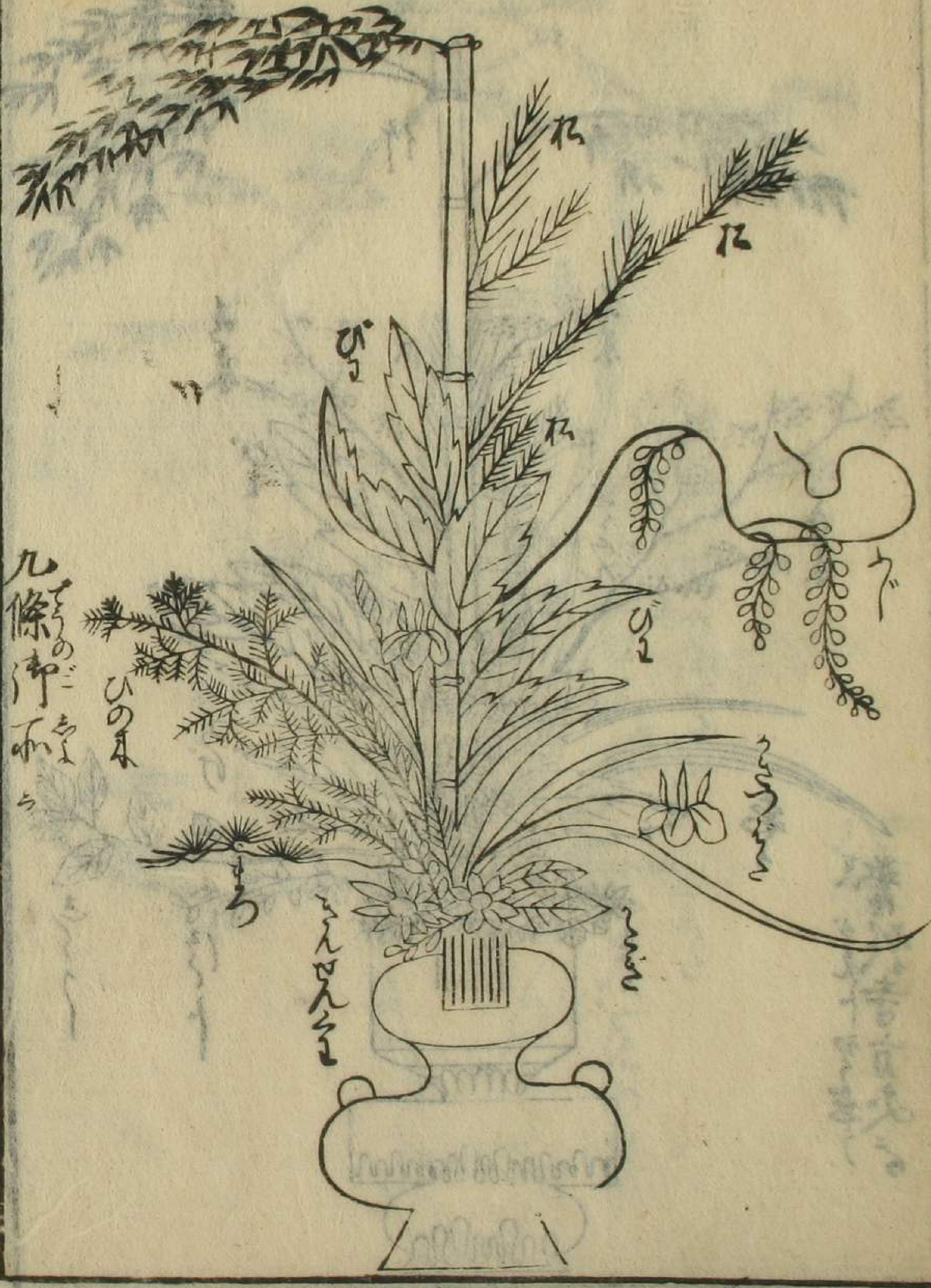
東寺（とうじ）ニ

かうらいの一しき
仙洞様（せんどうさま）ニ

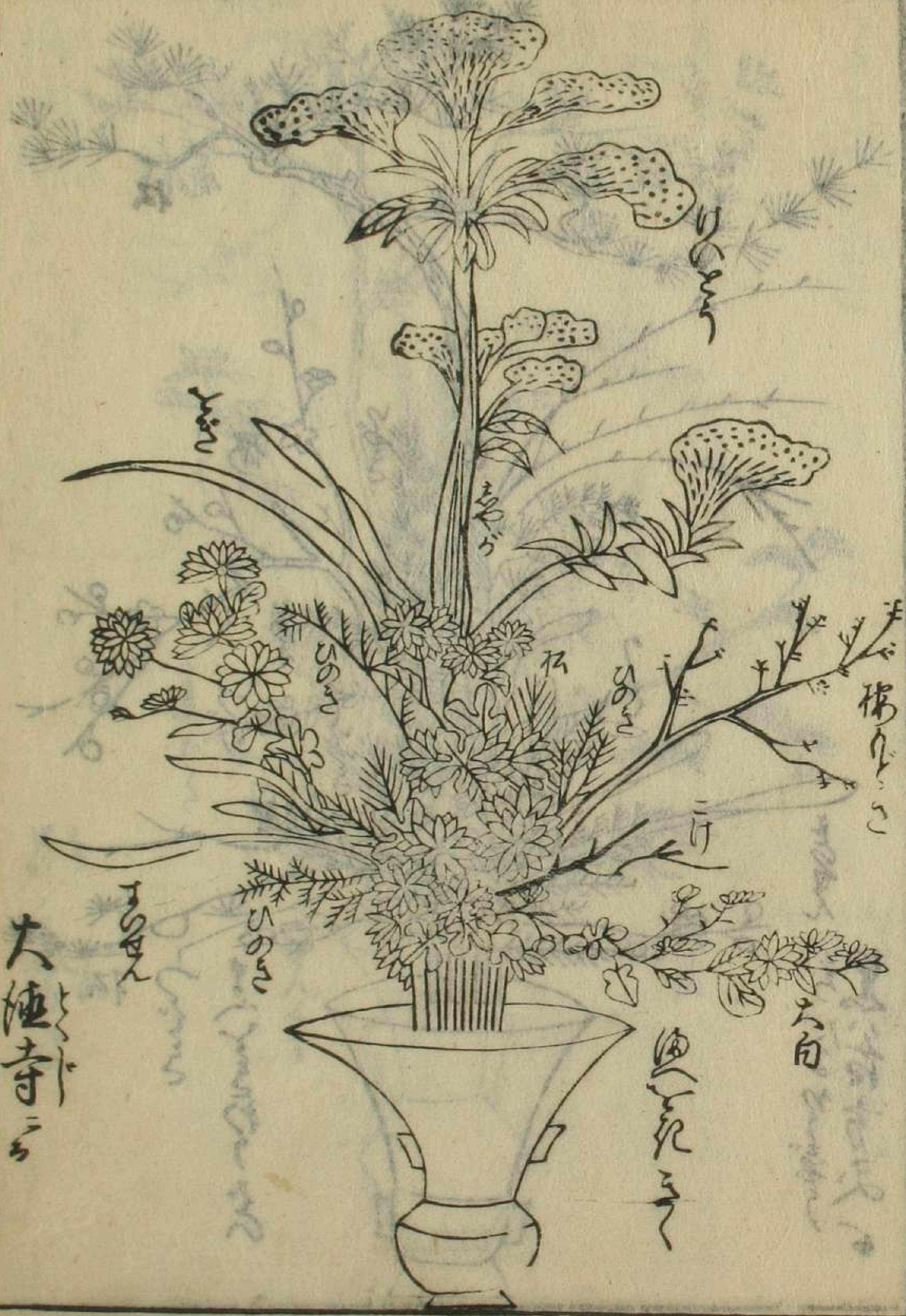
八幡（やわた）立



誓願寺方丈（せいぐわんじはうぢやう）立



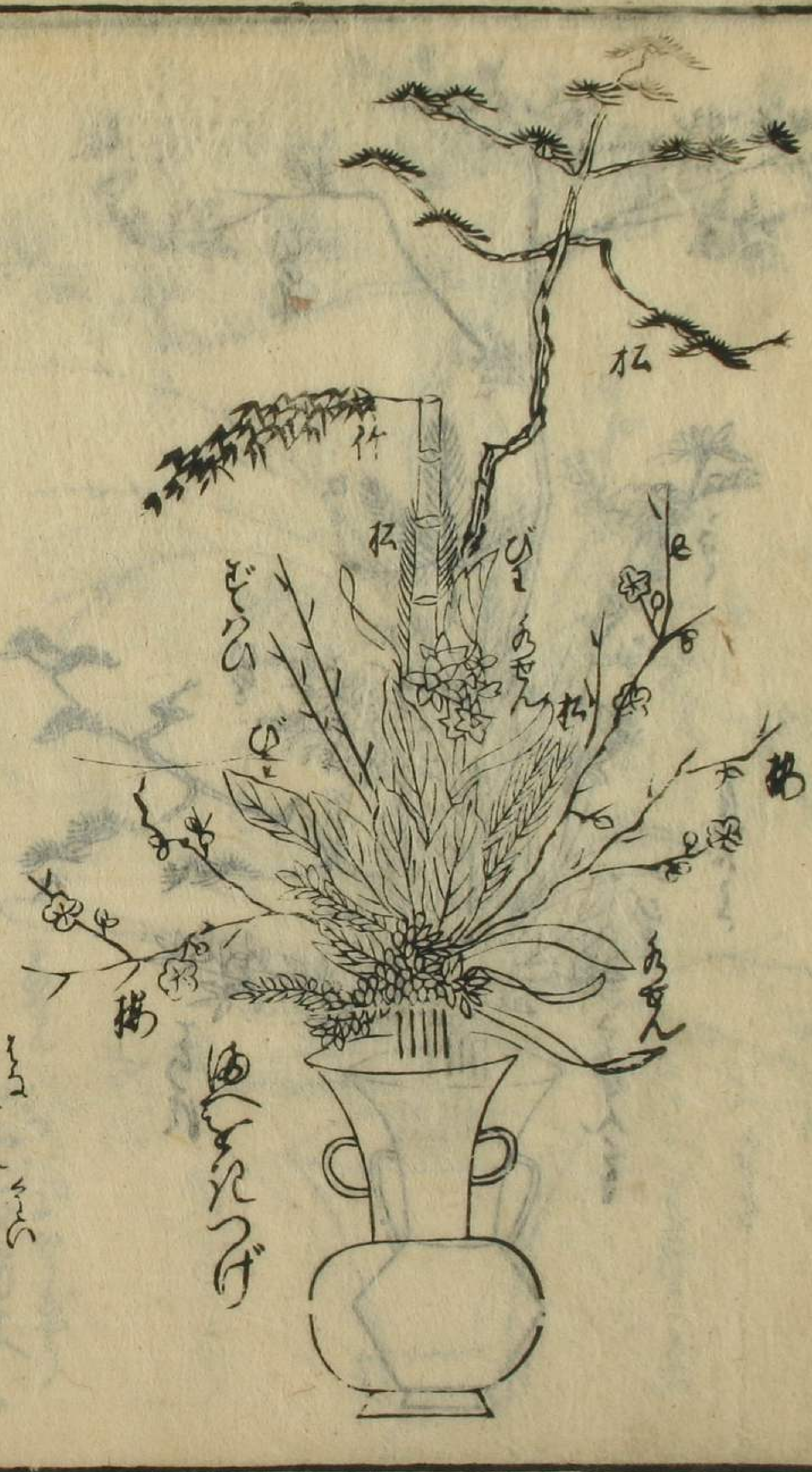
九條御所ニテ



大徳寺ニテ

黒谷方丈より

花之会より



花の会に

ちとせの一しき

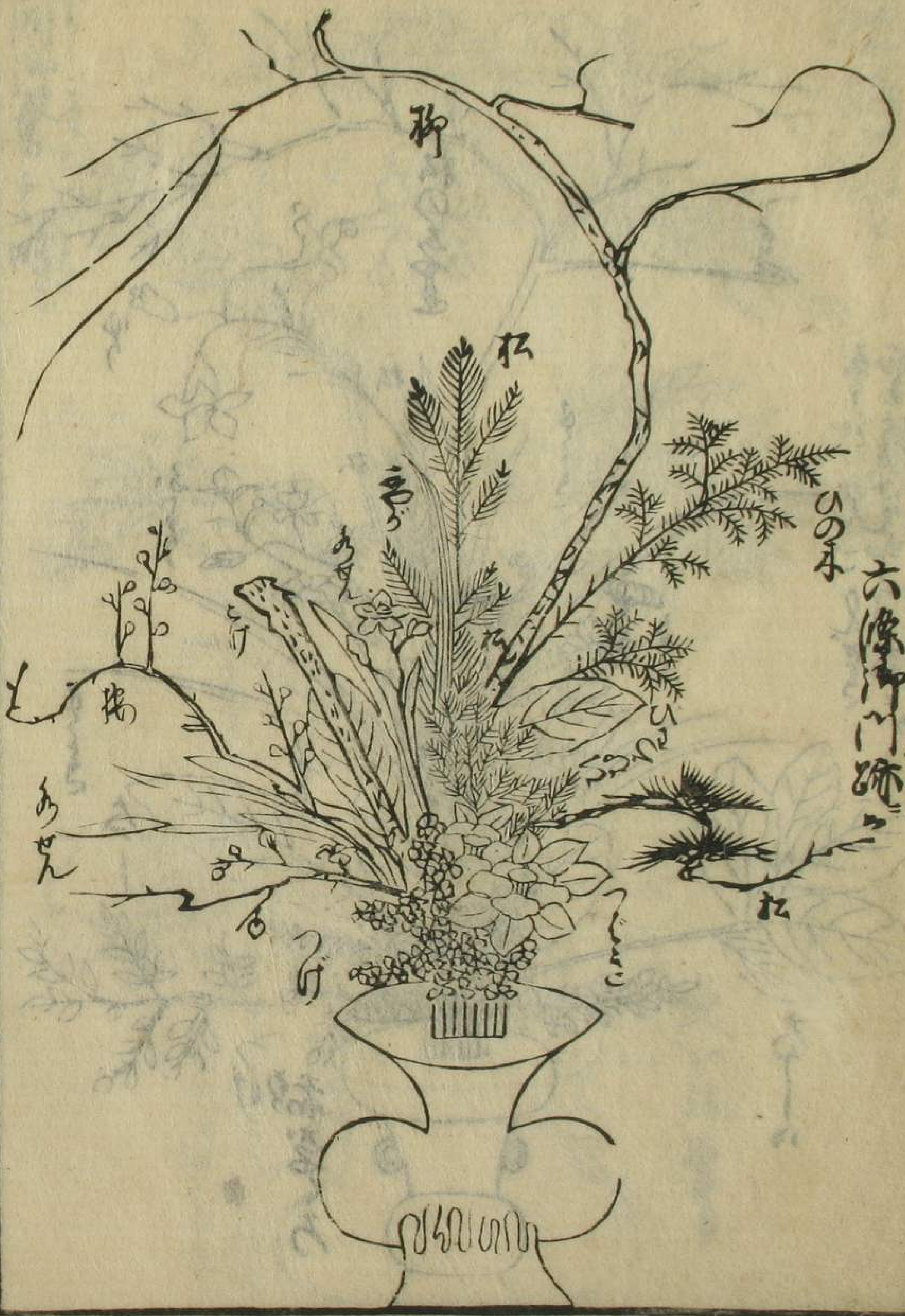
花うつはに七
葉うつはに九段
何しれも
蓮に二段
ゆりれな
くものゝとも

仙洞様にて一色花御会之時

桜の一色

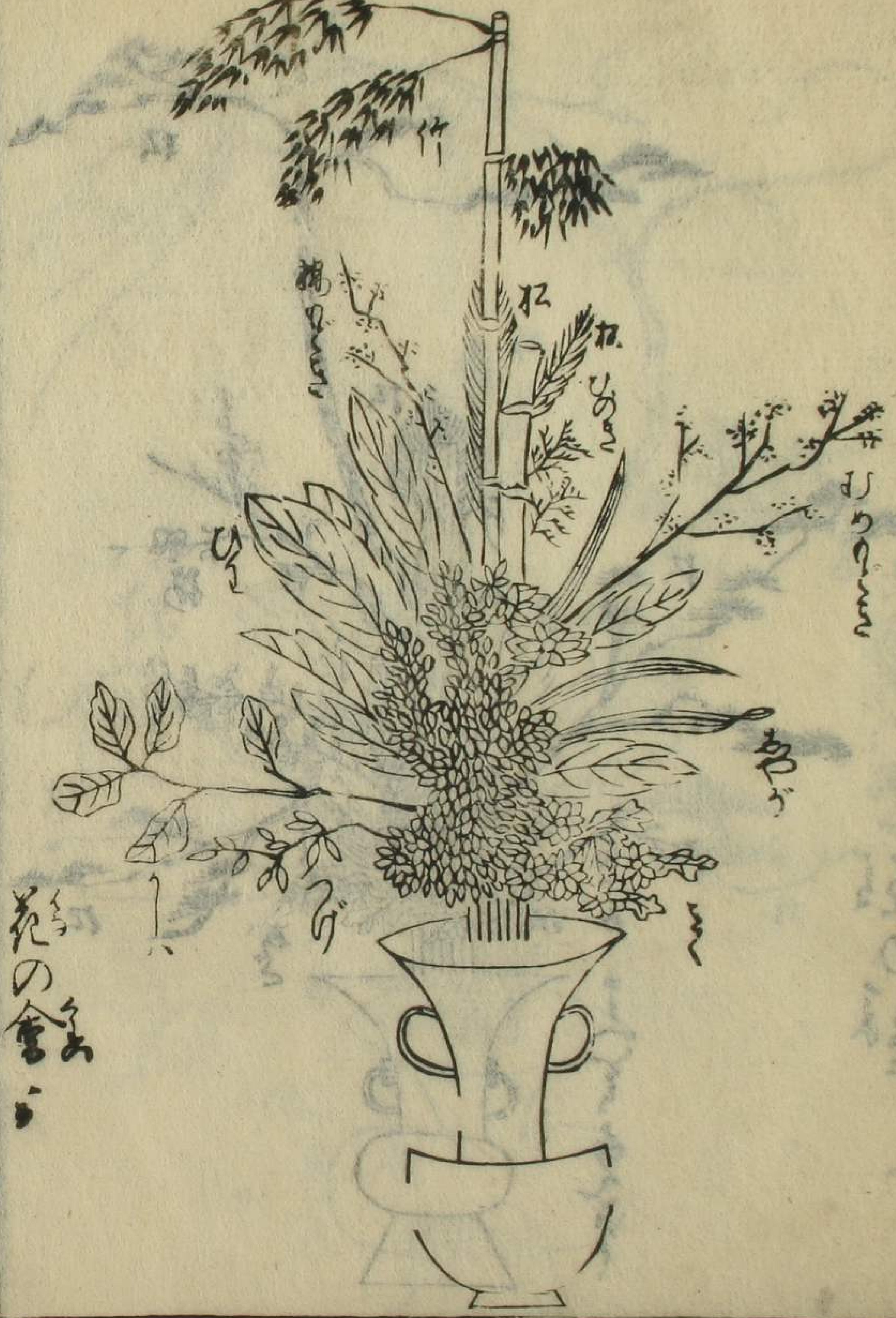
同御會の時

聖護院御門跡より

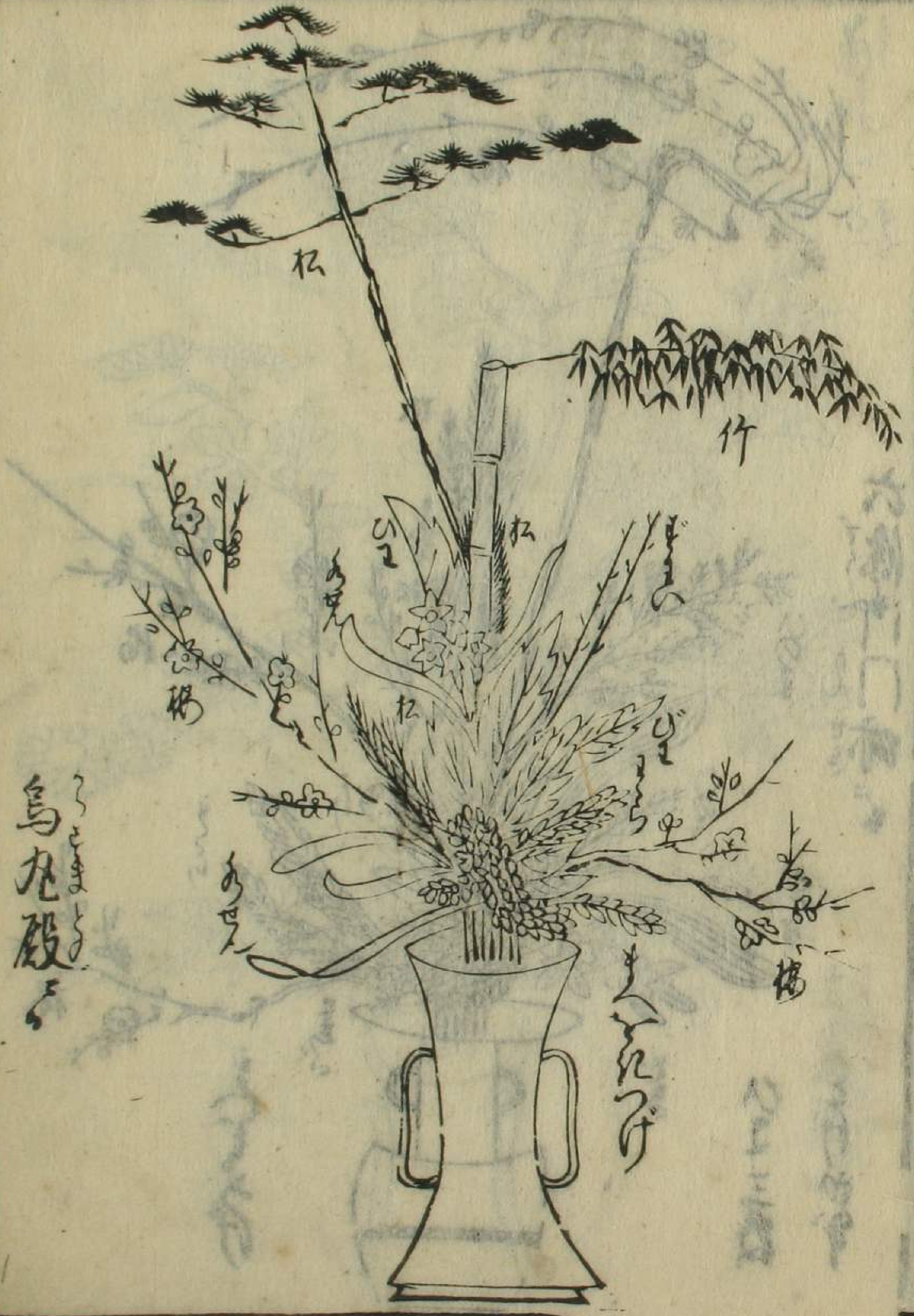


六條御門跡ニ

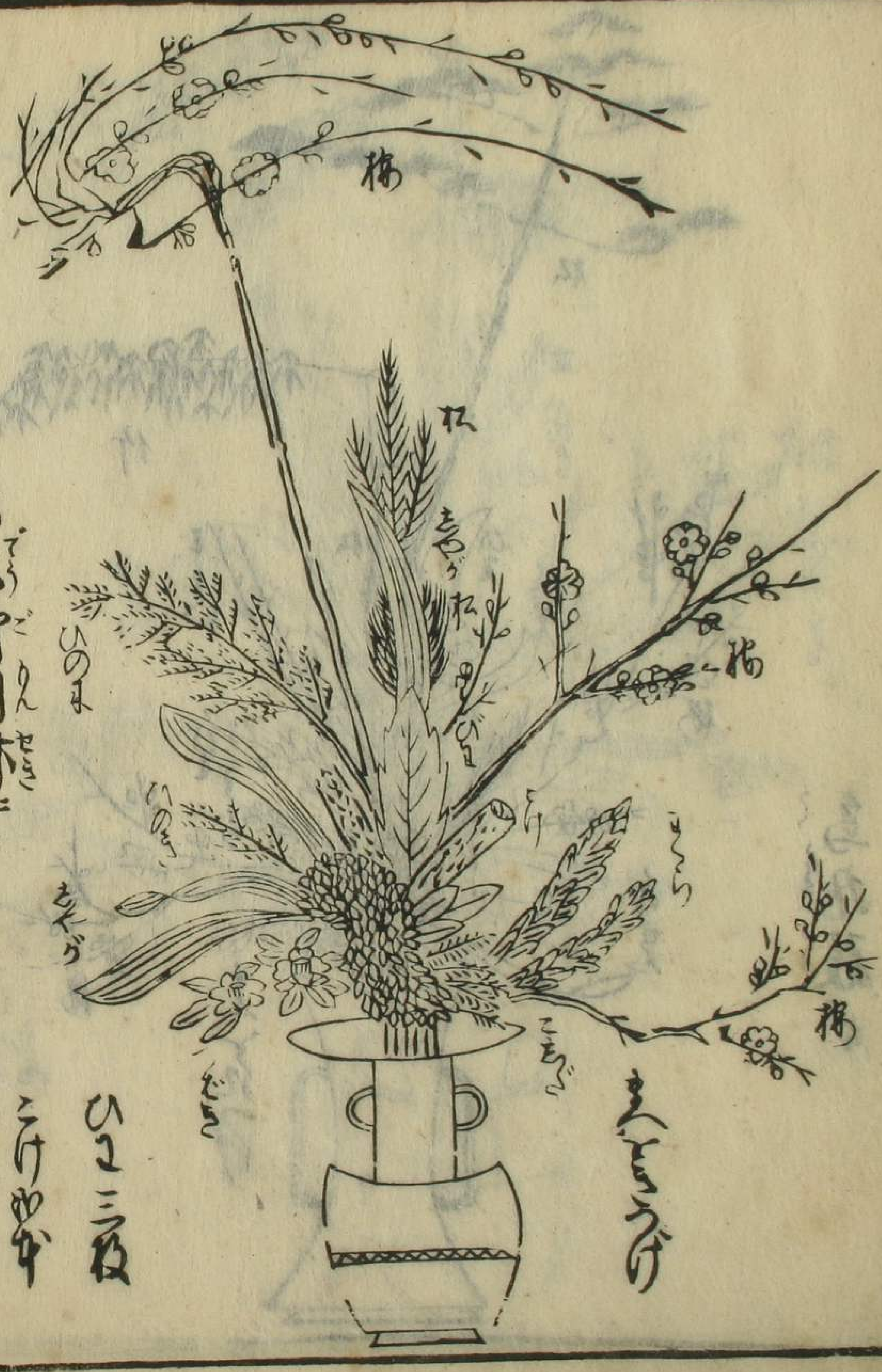
花の表

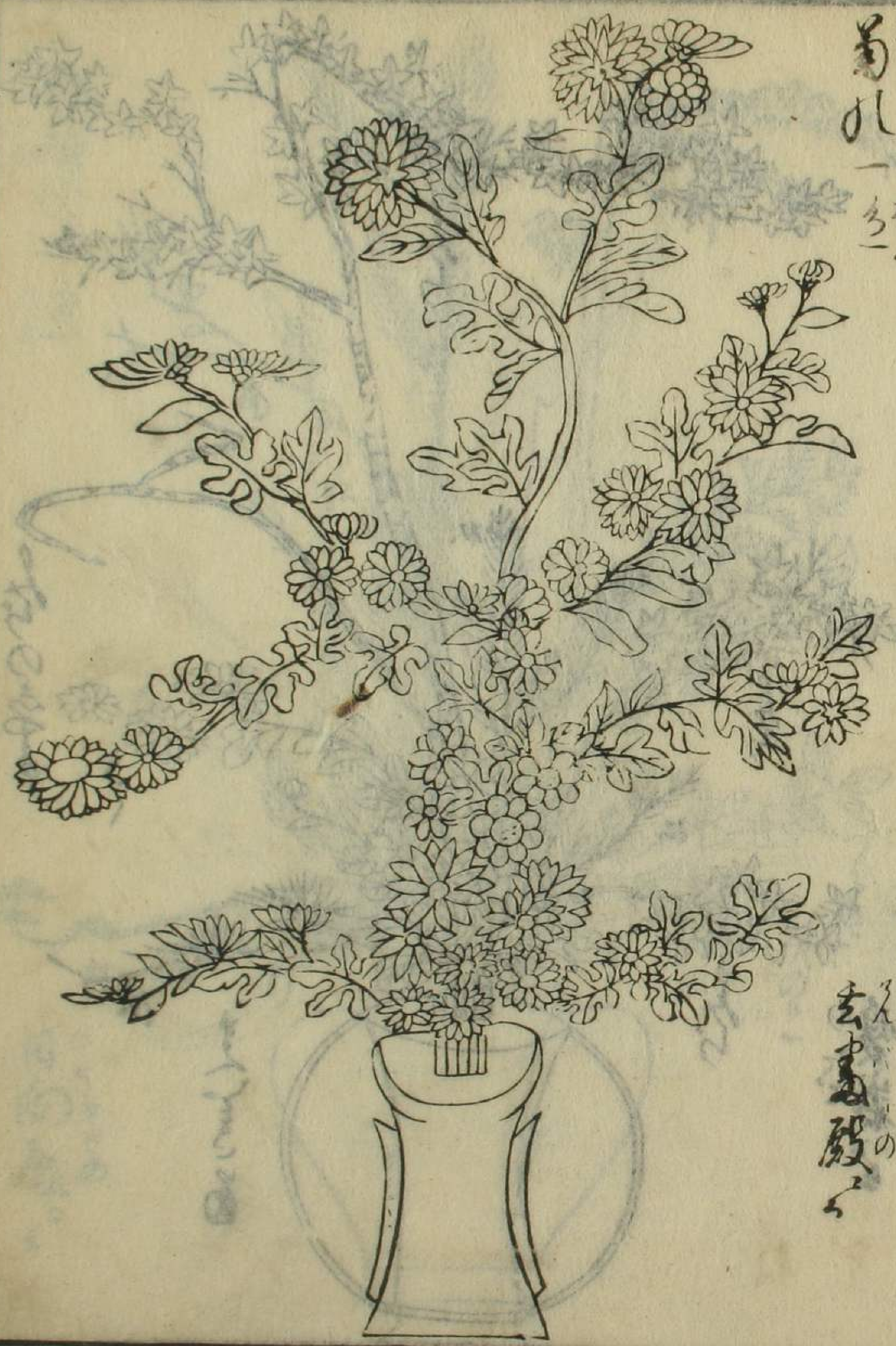


花の會より



烏丸殿より


六條御門跡より
梅
松
ひのき
ひさ三枝


菊

愛岩こう

日向殿こく

水仙の一色

ひのき

世遠流季人仏法薄也於立花之法
者而如雲乎恐失其傳是以輯數代家傳
口授秘決作為之冊號以為捧矣於家
傳授置而已哉于今者三百
有餘之中擇之若干顆五十瓶嗚
呼僭踰之罪而已

享保十四己酉年三月吉日

京寺町通松原上ル町

菱屋治兵衛板

小本仮名付　全部壹冊

藤原秀次家傳

外療細塹

此書ハ諸人の療法ハ家々の家傳秘方の出所並薬方ある所ハ其の
初心の人手段として此度相改熱病乃腫物の類ニ針灸の仕様諸
の膏薬名方并用様諸の療治名方内薬指合合薬洗薬煎物乃薬
腫物の見様膏薬の煉様并薬散薬秘法悉顕し世ニ弘む

懐中本仮名付　全部壹冊

道三秘傳

丸散調法記

此書ハ世にあまた有といへども初心の人分別なしかたし此度増補改正仕薬方一々
合せ様ハ申すに及ず委く記し懐中本ニ出来仕る此壹冊を懐にいれ
医学医心あるまじき人も療治にあやまちなく何方へ行とも其所に至るべし

京寺町通松原上ル町

菱屋治兵衛板

増補合類衆方規矩　永原了的増撰　山田昌殷校正　全一冊

世行所ノ衆方規矩者僅百廿方也今妙験アル要方ヲ増補セシム七百五十餘方トシテ舊本病門ヲ分ズ今悉分之門毎ニ加病論及ヒ脉論等ヲ薬剤ノ分量或生姜水一戔盞ノ分量用薬ノ一字銘ヲ詳載之初學ノ人今見易様片カナヲ加ヘ委記○点付無カナ○片カナ付○薄用本出來有之候

證治準縄　全部百二十冊

本艸綱目　貝原篤信著和名入　全部三十九冊

保赤全書　呉管撰　全部四冊

改正 大日本國神代系圖附社　武蔵國長幡五所宮　笠原豊前守藤原英證　表具一幅

外科回春　崇川陳實　半切本　全部四冊

難經本義　許昌滑伯仁著　四明呂復校正　全二冊

家傳預藥集　玄治　全一冊

道三脉論　サスノミコ　小本　全一冊

書林　寺町松原上ル町　菱屋治兵衛

世寶大成　萬金産業袋　全部六冊

此産業袋ハ世間一切諸職奥儀高貴の秘密物の仕様の秘術惣じて一切の諸道具故事寸法并織物類唐和の品幅丈尺だけあすべて物の制度作の心得并圖畫器物呉服類まで用ゆる所の正字大概記を

右此外に世間にあらゆる家職又ハ細工人事を悉く勤方などの品委曲に記し編集ある者也

此所に記し置ものハ

一 商人家職訓　全五冊

右之書ハ往古より商人売買において尤所々出世せし事どもを五巻に綴る

一 賢女心化粧

此書ハ貞女賢女の身持心ねの次第をこまやかに書顕し女子の手本とする草子なり

右之書先達てより出し置候得ども猶又本屋方へ御求め被下候様奉願上候

京寺町通松原上ル町

菱屋治兵衛板

中屋 湯嶋

京都書林

寺町通松原上ル町北ヨリ

太閤記　秀吉尾州に出生し生長に随ひ諸国に武名をあらハし遂に天下一統に帰し関白に任し後太閤と号し四十年の事を委しく詳記　全部廿二冊

漢国諸家前太平記　太閤立身の合戦の次第を委しく記　平かな絵入　十五冊

西国太平記　大永年中より文禄の頃まで西国合戦を委しく記　馬場信意撰　十冊

頼朝三代記　保元の中より承久の乱まで委しく記　平かな絵入　四冊

汀源武鑑　佐々木家の目録諸士の分限を詳に記す　二十冊

多田満仲五代記　朱雀帝の後三條院まで源家代々軍功記す　十冊

楠一生記　馬場信意撰　平かな絵入　十二冊

武者物語鈔　松田一楽作　七冊

新武者物語　平かな絵入　八冊

明朝太平記　忠性節義記并其便絵入　六冊

忠義太平記　四十七人の忠信記　入六冊

漢国諸家高名記　前太平記後編なり　平かな絵入　十五冊

聚楽物語　秀次公のはじめより次第を記　平かな絵入　三冊

古老物語　保元の中より天正のはじめまでの事を委しく記す　江嶋氏作　六冊

曽我物語　五郎十郎兄弟の伝記詳　平かな絵入　十二冊

平家物語　信濃前司行長撰　平かな絵入　十二冊

武道三国志　諸国の敵討記　平かな絵入り　十冊

絵本武者車　古今の勇士武功故事　委しく詳に記を　八冊

同大佛揃　朝鮮の軍す　同く下の返画　三冊

菱屋治兵衛板